

## ゆかなと献身的な看病

☆ゲームクリア後にお読み下さい

著者…なかひろ



「お兄ちゃん、起きて、お兄ちゃん。冬休みだからって、寝坊はダメだよ。あまりだらけてると、新学期が始まったときにツケが回ってくるんだからね」

今朝もまた、妹のゆかなに優しく揺さぶられて目が覚めた。

「ゆかな……」

おはよう、と声をかけようとしたのだが、喉が痛くて言葉にならない。上体を起こそうとしても、身体が重くて思うようにいかない。

そんな俺を見たゆかなが、ギョツとする。

「お、お兄ちゃん……大丈夫？ よく見たら、顔も赤い……」

ゆかなは心配そうにしながら俺の顔に手を当てる。ゆかなの顔が急に近くなって、ドキッとしてしまった。

「ウソ……すごい熱……」

……それはふん、ゆかなにさわれていることも原因の一つだろうな。

だが、体温計で計ってみても、やはり熱が高かった。どうも体調不良を起こしてしまっただろう。ゆかなはすぐに、俺のために水筒やタオルを用意してくれる。

病院が開く時間待って診察を受けると、風邪という話だった。

「あたし、今日はお兄ちゃんの看病するね」

俺を自室のベッドに寝かせたあと、ゆかなは献身的にそう言った。

「いや、たの風邪なんだし、俺のことは放っておいていいぞ。薬も飲んで薬になったしな。だいたいおまえは、受験勉強があるだろう？」

ゆかなは今、受験の真っ最中。来年の試験に向けて追い込みをかけている時期だ。

「せっかくの冬休みだし、勉強の息抜きがてらに遊びに出かけてもいいんだしさ。おまえもほかに、やりたいことがあるだろう？」

「お兄ちゃんの妹ツンデレ！」

「……なんだよ」

「だって今のあたしが一番やりたいことは、お兄ちゃんの看病だもん……って、も、もうっ。病人のくせに恥ずかしいこと言わせないでよっ」

ゆかなは顔を赤くして、言い訳がましく言葉を続ける。

「お姉ちゃんが病室で家にいないし、お兄ちゃんを一人に任せておけないもん。ほんと、お兄ちゃんにはあたしがいないとダメなんだからっ」

そんなふうに、優しさが見え隠れする言葉をもらった俺は、妹がそばにいてくれる大切さを噛みしめることになった。

「お兄ちゃん、具合はどう？」

ベッドで休んでいる、ゆかながお茶を持って部屋に入ってきた。

「おかゆ作ってきたんだけど、食べられそう？」

「ああ、少しは食欲もあるし。ありがとうな」

「えへへ……お兄ちゃんがめずらしくあたしにデレてる」

ゆかなはうれしそうにしながら、ベッドの近くに座る。

「じゃあ、はい。あーん」

おかゆをんげですくって、俺の口まで持ってくる。

「……いや、自分で食べられるって、そんなふうにされると、食べづらいし」

「お兄ちゃんが、アレからフンに戻っちゃった……。あ、そっか。おかゆが熱くて食べづらかったんだね」

ゆかなはんげのおかゆに、ふーふーと息をかける。そういうことじゃなくて、恥ずかしいからなのさ。

「はい、お兄ちゃん。あーん」

断れる雰囲気ではなくてきたので、恥ずかしさを我慢して、ひと息に食べる。

「お兄ちゃん、どう？」

「……おいしいと思う」

正直、照れやら風邪の影響やらで、味はよくわからない。『よかった……。それじゃあ、また、お兄ちゃん、あーん』

俺の腹が満たされるまで、ゆかなはあーんしてくる。俺の熱は、食べる前よりも高くなってしまったかもしれない。

「えへへ……。こういうの、いいな」

ゆかなは照れ笑いを浮かべている。そんなゆかなはきつと良いお姉さんになれる。

だけど、本当にそうならば、ゆかなは俺のそばからいなくなる。

それはとても寂しいことではないかと、俺は再び眠りにつきながら思うのだった。